

28. びまん性肝疾患の診断への^{99m}Tc-phytateの有用性

○今枝 孟義 仙田 宏平 福富 義也
国枝 武俊 石口 修三
(岐阜大・放)

目的 従来我々は¹⁹⁸Auコロイド肝シンチによるびまん性肝疾患の診断・経過観察および予後判定につき報告してきた。しかし¹⁹⁸Auコロイドは肝への被曝線量が非常に高く、さらにKupffer's cellから排泄されにくい欠点がある。今回^{99m}Tc-phytateにより検討したところかなりよい臨床的結果を得たので報告した。

方法 ^{99m}Tc-phytateの7～15mCiを静注して20～30分後からNuclear Chicago製シンチカメラHPを用いて左右の正面、側面および症例によっては後面の6面シンチをpreset timeで呼吸停止

下にて施行した。対象とした症例は日常もっともよく遭遇する急性肝炎、慢性肝炎、肝硬変症である。

結果 1. ¹⁹⁸Auコロイドで脾の描出のはっきりしない慢性肝炎、肝硬変症で^{99m}Tc-phytateは、^{99m}Tc-S-Colloidほどではないが脾をを鮮明に描出し、その大きさ、脾内摂取率からportal hypertensionの有無の判定が可能であった。2. 肝硬変症で¹⁹⁸Auコロイドによって肝の描出が非常に悪い症例において^{99m}Tc-phytateは、肝をよく描出しその内部構造の判定を可能ならしめた。3. 慢性肝炎、肝硬変症で時々認められる右葉の後方へのおちこみのために正面像でpseudo tumorを呈する症例において、側面像などを加えた多面シンチによって鑑別診断が容易であった。4. びまん性肝疾患の経過観察に^{99m}Tc-phytateを用いることは可能であった。